Japanese Association for Religious Studies

ずして誰ぞ。……　三諦円渉にして　十世無礙なり。三種世間は、皆なこれ仏体なり。四種曼荼（大曼荼羅・法曼荼羅・三摩耶曼荼羅・羯磨曼荼羅）は、即ち是れ真仏なり。汙の実義、応に是の如く学すべし。……」とある。空海の他の文献にも、こうした思想を見ることができる。

このほか、禅宗の道元もまた、『正法眼蔵』「山水経」において、「而今の山水は、古仏の道現成なり。ともに法位に住して、究尽の功徳を成ぜり。空劫已前の消息なるがゆえに、而今の活計なり。朕兆未萌の自己なるがゆえに、現成の透脱なり」と説いている。山水は仏として説法しているというのである。

というわけで、日本仏教の多くの立場では、むしろこの我々人間が住む娑婆世界がそのまま仏の国土であるのだと説かれていることを見た。以上の「仏教の環境観」は、サステイナビリティを追求する立場に対して、どんな意味を有していると考えられようか。以下、多少なりとも、その意義をくみ取ってみたい。

①自己と環境の不二の関係の了解に基づく、自己観・自然観の変化による自然環境への姿勢の改善。

②環境の仏国土性の了解による、自然環境尊重への根本姿勢の確立。

③心の浄化が自然の徳の顕現につながることの了解による、環境倫理、ライフスタイルの方向性の明確化。

ほかにもあると思うが、ひとまず仏教思想の中に見出されるエコ・フィロソフィの可能性について考察してみた。

天人相関の理論と実践
――風水と煉丹術――

野村英登

東西の自然観をいうとき、しばしば我々は調和と支配を対置しがちであるが、中国では、人間は自然を生きていく上での規範としつつ、同時に統制の対象ともしてきた。その自然観を代表するのがいわゆる天人相関の思想であり、その工学的な実践として風水や煉丹術がある。それぞれの内容についてはすでに多くの研究が存在するので、その成果に拠りつつ、ここではエコ・フィロソフィを考える上での重要な論点を示してみたい。

まず儒教による帝国の体制理論を組み立てた漢の董仲舒から代表的な天人相関の思想をまとめてみよう。彼の議論で多く費やされているのは、「天地の間に陰陽の氣有り。常に人を漸（ひた）すは水の常に魚を漸すが若きなり。水と異なる所以の者は見るべきと見るべからざるのみ。……是の澹澹の中に治亂の氣を以て之と流通して相殺饌するなり。故に人氣和調して天地の化美たり、悪に殺（ま）じれば味敗る。」（『春秋繁露』如天之爲篇）といった自然観を背景として、「刑罰中らざれば、則ち邪氣を生み、邪氣下に積めば、怨悪上に畜（あつ）まる。上下和せざれば、則ち陰陽繆（みだ）れ盩（もと）りて妖孽生ず。此れ災異の縁りて起こる所なり」（董仲舒伝）として、人間の行いが天地の運行に機械的に影響を及ぼしうるという理論

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

の構築であった。また社会の統治にあたって儒家が課題としたのものに「徳」と「刑」の調整があるが、これについても天地の「陽」と「陰」の気にその倫理的根拠を求めつつも、「徳を留めて春夏を待ち、刑を留めて秋冬を待つや、此れ四時の名に順ふこと有るも、實に天地の經に於いて逆らふなり。人に在る者も亦た天なり。奈何に其の久しく天氣を留め之をして鬱滯せしむれば以て其の周行を正すを得ざらんや」（如天之爲篇）と、原理的な対応が常に真ではなく、人間感情の自然な発露に根ざした行為を重視した。

「氣風に乗らば則ち散じ、水を界とすれば則ち止まる。古人これを聚めて散ぜしめず、これを行いて止まらしめず、故に風水と謂う」（郭璞『葬経』）ように、ただ自然の法則に従うだけではなく、人間側から積極的に働きかけていくのが風水の基本的な態度である。実際、先祖の墓地の場所を定める陰宅風水にしても、住居環境を定める陽宅風水にしても、もちろん最も重要なのは「気」のよく集まる最高の自然環境を求めることであったが、人々は当然のように、時に人工的に川の流れを変え、時に塔を山の上に立て、人間の手で自然を操作しようとした。そこから一歩進めば、その自然法則そのものを拒否しようとするようになる。永遠の生命を求める煉丹術では、「天地に後れて生ずる者は、皆天地の内を離れず。有形なる者未だ嘗て壊れざるなし。安ぞ能く變化して天地の外へ超えんかな。天地の外に超えずして有形なる者は、未だ始めより陰陽生死の數に墜ちざる者にあらざるなり。」（『紫陽眞人悟眞直指詳説三乗秘要』悟眞直指詳説、DZ一四三）と、むしろ天地と調和しているかぎりにおいて人間は死の運命から逃れ得ないため、天地以前の根源的存在である道によって天地に等しい存在になろうとするのである。

以上のように、天人相関の理論を推し進めれば、こと自然環境にかぎらず、個人の生活から社会政策の問題までもが自然の調和的なデザインの対象となる。しかし風水や煉丹術の歴史からも明らかなように、倫理的な正しさを一意的に自然に求めるだけではうまくいかない。報われていない現実があるからこそ、常にその調和を引っ繰り返そうとする試みがなされ続けてきた。つまり、どの選択に優先順位があるのか、それは人の社会が「邪気」を出さない方向へと合意が取れる選択こそが望ましい。エコ・フィロソフィの射程がそこまで伸びてこそ、真に価値あるものになるのではないだろうか。

パネルの主旨とまとめ

渡辺章悟

人類全体の緊急の課題となっている自然環境の問題について、宗教はどのように考えてきたのか、また将来に向けてどのような見通しを持ちうるのか。このような問題を、おもにインド・中国・日本における東洋の宗教の中から検証し、そこから宗教の可能性を探ろうというのがこのパネルの趣旨である。

最初に宮本久義と橋本泰元が、多様な宗教構造を持つインド

NII-Electronic Library Service